

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成20年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第48巻2月号(通巻583号)

風土



2

寒牡丹
神蔵器

初夢やインクの氷る師のあたり
くれなゐに疑心はあらず牡丹の芽
松は覚め櫂は眠る初日かな
誰も越す一と跳び川や去年今年
初日さす恋告げ鳥の石打つて

註 恋告げ鳥は鶺鴒のこと

寒牡丹蕪村の空を深くせり

風呂吹やほうほうほうと子規のこゑ

母泣きしところ 柊花匂ふ

火を熾すことがはじめの初墓参

葱抜けばまんを持したる妻のこゑ

凍蝶にふれしは誰ぞ微塵かな

竹筆に一字のかすれ淑気充つ



竹間集

同人作品



しぐれきたりけり

瀬戸

悠

銅像のアテネの戦士冬来たる
からびゆくものに海馬も冬に入る
赤門を出前の通る一葉忌
胞衣塚へ茶の花垣のつづきをり
蒟蒻をちぎればしぐれきたりけり
鳥寄せの指笛ひびく冬の空
海鳴りの天心旧居石路の花

花八ッ手

塩田 博久

蕎麦咲くや遠富士は雪被き初む
参道に暖簾吹かるる神の留守
寺町に古木の多し寒茜
二代目も内科小児科花八ッ手
妻留守の干し物かわく冬の鵒
馬馬馬の博馬文字歩み出す小春かな
息白し高啼く鶴と見る我と

茶の花

代田 青鳥

茶の花や元校長の地藏眉
手袋を脱ぎて握手の列に着く
軽快に井戸使ふ音路地小春
八手咲きメンタル・ヘルスコ奥の奥
ぼつかりと洩れし一日や十二月
阿羅漢の福耳揃ひ竜の玉
手も口もよく動くなり牡蠣割女

鷹 渡 る

— 宮川みね子 —

一位の実一粒赤きたなごころ
ポケットに木の実の童もち歩く
神蔵器句碑建立
白椿星の高みに句碑の建つ
句碑建つやまさをなる空鷹渡る
句碑なしていのちあたたむ初笹子
魯田の穂のあをあと神迎
真如堂
鈴聲山真正極樂寺白式部
大甕の水のゆれゐる破蓮
綿虫とぶ墓の去来は膝の丈
椎の実落つ去来祭となりけり

一仏に一燭しぐれ来たりけり
驚峰山高台寺の竹林深し穴まどひ
ねねのみち小みち紅葉の季となれり
霊屋の厨子の蒔絵も冬に入る
冬ざれや臥龍廊へは往かしめず
四十雀山雀のきて無垢の空
冬の虹耳に川音のこりをり
青空の芯硬くなる冬の蝶
鷹渡る千羽ひかりの粒となり
笹鳴のきてゐるたしか法然院

山河集

同人作品



神蔵器選

時雨るるや巳の日参りの下駄の音
煌きて月の匂ひの氷柱かな
本尊に向き合ふ角座山眠る
秋の暮靜に熾す夕餉の火
花八つ手水音荒く船洗ふ

近藤幸三郎

板戸絵の飛天に時雨灯かな
冬桜一枝携へ無言館
自らを枯野人とし歌枕
木守柿自尊の赤でありしかな
人間も嘗める傷日冬の鵞

天野みゆき

千一回振りて漬けたる秋茄子
崖下に並ぶ二階家葛の花

山形民田茄子

柿沼盟子

紅葉散る川の真中をタグボート
隙間生る十一月の掲示板
まだあをき銀杏並木に時雨かな

古永すみれ

秋澄める高野大門仁王立つ
冬ぬくし三鈷杵御手に大師像
身にしむや秀次自刃の柳の間
高野路は祈りの道や笹子鳴く
冬ぬくし播粉木にある握り艶

高瀬志す江

一夜にて寝釈迦在せる雪の峰
裸木にツリーの点滅ローカル線
柿すだれあかがね街道花輪宿
鉞山の灯の消えて雪虫灯をとます
冬たんぽぽ一揆の村を温めゐる

◇特別作品◇(抄)

初冬の白神

本間 羊山

藁塚は子らの日時計夕がらす
枯芝や細き脚もつ鳥の影
逃げるだけ逃げて布陣の鴨騒ぐ
残り実の色を極めて冬立てり
いささかの葱伏せて婆明日を待つ
立冬の干したるものに日の滑り
ちちちちと気をひく笹子視野にあり
夕すさぶ風に添へゆく波の花
ねずみ穴そのままなるに年の暮
冬ざれの森にかそけき鳥の鳴く

風土独語／神蔵器



空といふ巨き鳥籠百合鷗

豎山 道助

作句の基本は写生である。よく観ることは勿論大切なことだが、車がスピードを出せば出すほど視野は狭くなり、焦点がだんだん絞られてくる。そこで、時に一步二歩退って見ることはより大事なことである。逆に自分が一步でも二歩でも退って見れば、それまで在ることが当然として見えていながらも気付かなかった大空の広さ、広大な宇宙が見えてくる。

かつて中村草田男と山本健吉との「軽み」についての論争があった。草田男の考え方は、

「ただねばるだけです。ただ諦めないのです。諦めてしまつたら、その瞬間からもう万事終ります」。一方健吉の考え方は、「私は諦めということもそう悪いことにはかりはとらない。人事の限りを尽す、人工の限りをつくすのが芸術です。ですからただねばるだけということは、やはり芸術家の覚悟としては大事なことなんです。しかし、ねばるだけで到達する境地はたかが知れている。ねばってねばって人事の限りを尽した後は、自分よりも偉大なもの、造化の力、あるいは自然の力にゆだねる。これは諦観であり明察なんだ」と反論。そして例えば「日本庭

園は庭師の手を離れて、それから後の完成は歳月にまかせられるです。春夏秋冬、植えられた樹木も成長し、苔なども生え、さびがつき非常に深い味が出て来ます。庭園そのものが自然と一体化してはじめて日本庭園は完成したと言えるのです」と言う。日本庭園はまさにその通りであるが、そもそも文芸に完成などあり得るであろうか。第一、個人の働きに、誰が人事の限りを尽し、人工の限りを尽したと断定出来るようか。

私の一步二歩退ると言ったのは、生き方にほどほどのゆとりを持ち、心の自由を得たいということである。心が自由であればこの世に生きていること自体、自然の恵み、神の恩寵であることを実感するであろう。そして、そう感受する時、百合鷗も大空という神の掌の中に美しく白いかげやきとなつて羽搏いている。

ふとこころに鳥獣保護区山眠る

間島あきら

鳥獣保護区は鳥獣の保護や繁殖のため、環境省または都道府県知事が鳥獣の捕獲を禁止した区域である。全国にはかなりこの保護区がある。季語の「山眠る」はよくついて申し分ないが、欲を言えば、気になるのはつき過ぎているところだろうか。

風土集



神蔵器選

崩してはまた積む積木文化の日川崎
空といふ巨き鳥籠百合鷗

豎山 道助

時雨るるや牛は牛舎に反芻す
時雨るるや離島の太鼓保存会
夫婦棲むシリコンバレー冬の鵒
ふところに鳥獣保護区山眠る 藤枝

間島あきら

雁渡る峽の一戸に水の音
相生の杖節ごとの秋思かな
鉄鉢の七寸を打つ霰受く
日の匂ひ風の匂ひの藁ぼつち
涅槃石落葉散華を享けてをり 京都

南奉 栄蓮

京時雨句碑の緑を誘ひだす
巻物の去来の俗名榎 植の実
「燃ゆる」句碑据りよろしく笹子鳴く
句碑の字の力強さや冬椿

糠漬の秋茄子贅を極めけり 横浜

安永 圭子

英太郎さんを偲ぶ

秋の灯や数珠の手に落つ雨のつぶ
神の留守腹筋体操始めたり
しづけさに遠流の島の花八ツ手
きりぎしに波音見るや花八ツ手
小春日や天台座主の頭陀袋 高槻
冬桜拝殿下にブーツ折れ
短日の仏彫りたる木端かな
綿虫の光悦垣に沿うてをり
母の忌の綿虫はてのひらが好き
持ち上げて閉める裏木戸花八つ手
粥で接ぐ土鍋のひびや夕しぐれ
ひづめ痕馬場に残りて時雨かな
軒に入る大内宿の時雨かな
パソコンの寿命縮まる神の留守

東京

奥田 茶々